

## 〈授業報告〉

### 新しい心像イメージをつくる

—— 小学校五年生における詩の鑑賞指導 ——

山 本 哲 生

#### 一、はじめに

宮沢賢治の詩の授業の中で、兼松理心（女兒）はこう書いている。「最初読んだときは、意味がまったくわかりませんでした。でも、みんなと話し合っているうちに、しずんでいたものがうかび上がってきました。」

詩は散文と異なり、多くの場合言葉の省略や凝縮がなされ、児童詩は別として、その難解さから「なんのことやらよく分からない」と嫌う児童もいる。しかし、その「短さ」ゆえに、言語の用法、感覚、リズムとか、発想等の点で、強烈なインパクト（衝撃・影響）を与えたり学習効果をあげたりすることが可能である。

「詩のレベルと学習レベルは違っており、小学生に萩原朔太郎や三好達治を教えるのは発達段階上無理がある。」とする考えもあるが、私は、その難しさをこえて、まず本物を与えていくべきだと考え、小学生にもできる限り本格的な詩人の作品を与

えていこうとした。名詩を声に出して読み、集団で話し合う中で子供たちがその良さに触れ、名詩になじんでくれたらと思ったからである。

詩には沈んでいるものが多いことから、想像する楽しさがある。想像とは、「現実の知覚に与えられていない物事の心像（イメージ）を心に浮かべること。過去の経験を再生する場合と、過去の経験を組み合わせる新しい心像をつくる場合とがある。」（広辞苑）ということだが、個々の心像を出し合い、集団で練り上げていくところに詩の授業の一つの意義があるう。

五年生の初期（五・六月）の段階において、子供が新しいイメージをつくる授業を試みた。

#### 二、詩の鑑賞指導のねらいと学習活動

私が詩の鑑賞指導でねらうのは、主に次の二点である。

(1) 大事だと思ふ言葉や気になる言葉に着目したり、詩全体のリズム、構成、主題をとらえたりすることにより、言語その

ものや詩的表現に対する感性を磨き、知性を身に付けさせる。

(2) 詩人の豊かで個性的な発想から、ものの見方や考え方をさぐり、物事を見る目を育てる。

感性は教えらるものではないが、磨き合うことは可能である。「詩を教える」か、「詩で教える」か。「感性の詩教育」か、「見方の詩教育」か。指導者としては難しい問題ではあるが、私は、次に挙げる学習活動を大切にして授業を進めた。

### (1) 視写活動

作者（書き手）の思いに迫り、話者（語り手）の息づかいをとらえるのに視写は欠かせない。繰り返し声に出して読み、ていねいに一字一句を書き写すうちに、いつしか作品の世界に浸っていることがある。教師は黒板いっぱい、子供は白紙に、言葉を味わいながらゆっくり視写させる。

### (2) ある言葉に着目し、思いや考えを書きこむ活動

自らの感動をいかにして表現するか、詩人は言葉を選び、行を重ね、全体を組み立てる。選びぬかれた言葉の中に、読み手を立ち止まらせるものがある。それは個人によって違うのも当然であろうが、気になる語句や重要だと思う語句に着目させたい。そして、それらの言葉に傍線を引いたり枠囲みを入れたり、自分のイメージや考えを書きこむ作業を通して、まず個人の読みをつくらせる。

### (3) 思いや考えを表出する活動

個別あるいは集団によってイメージをつくり上げていくことは、作品の世界を共体験している姿である。個々のイメー

ジ等を言語表現として外に出す営みは、詩的表現を自分のものにしたり、主題に迫る上で重要な活動である。また、書くことによって、自らのイメージや考えを鮮明にすることもできる。

### (4) 朗読から暗誦への活動

詩は読んでリズムを味わうものである。そのリズムや語感、黙読ではとらえにくい。何度も声に出して読むうちにリズムをつかみ、子供はいつしか暗誦している。暗誦を目的とした場合でも、しだいに余裕を持って唱えることができ、詩そのものに親しむ。

## 三、単元構成の工夫

六年生に短歌・俳句の鑑賞指導をしたとき、読み味わい方が貧しく、「これまで、もっとじっくりと詩精神に触れさせる機会を持つべきだった」と反省。高学年の入口に立った五、六月に一気に詩の世界へ踏み入れ、浸らせようとし、単元の構成を工夫した。

(1) 単元名 詩の世界をさぐる（教科書・光村図書五年上「詩を読もう」と関連させて）

### (2) 目標

- ① 詩にこめられた詩精神に触れることにより、その美しさを深く読み味わうことができる。
- ② 詩人の詩から学んだことを生かして、表現を工夫した詩を書くことができる。

③ 詩の内容や表現の特徴をおさえて、朗読することができる。

(3) 指導計画

① 取材をして詩を書き、詩集Ⅰとしてまとめた後、学習計画を立てる。

② 教科書教材「春」(坂本遼)を読み、詩の読み方について知る。(二時間)

・作者と話者(語り手)、視点、連構成、対比、方言  
教科書教材「蛇」(嶋岡晨)、「われは草なり」(高見順)「海雀」(北原白秋)を読み味わう。(五時間)

・比喩、表記、リズム、文語、七五調、対句、反復  
④ 投げ入れ教材「作品第一〇〇四番」(宮沢賢治)、「蛇のうた」(室生犀星)、「雪」(三好達治)を読み味わう。(六時間)

⑤ 教科書「朗読の楽しさ」を読み、好きな詩を朗読したり暗誦したりする。(二時間)

⑥ 学習したことを生かして再び詩を書き、詩集Ⅱを出して読み合う。(三時間)

⑦ 語句や漢字の学習をし、評価を行う。(一時間)

四、授業の実際 A

本稿では、前項(3)の④の授業について、その概要を報告する。近代詩人の詩を小学五年生がどう読んだか。児童は、附属小学校五年三組の三十九名(男子二十名、女子十九名)を対象とした。

作品第一〇〇四番

宮 沢 賢 治

今日は一日あかるくにぎやかな雪降りです  
ひるすぎてから  
わたくしのうちのまはり(まわり)を  
巨きな重いあしおとが  
幾度ともなく行きすぎました  
わたくしはそのたびごとに  
もう一年も返事を書かない  
あなたがたづねてきたのだと  
じぶんでじぶんに教へたのです  
そしてま(ま)つたく  
それはあなたのまたわれわれの足音でした  
なぜならそれは  
いつばい(いつぱい)積んだ梢の雪が  
地面の雪に落ちるのでしたから

(「春と修羅」第三集より)

(1) 指導にあたって

宮沢賢治の物語を読んでいる児童は二十六人。詩人でもあることを知っていたのは五人。農業をしていたことを知っていたのは二人である(事前調査)。

賢治の詩の多くは難解であるが、賢治は詩を「心象スケッチ」という方法で表現している。そのことを詩人・草野心平は「世界の詩10 宮沢賢治詩集」の解説の中で次のように述べている。

詩は裸身にて理論の至り得ぬ塚を探り来る。

そのこと決死のわざなり。

イデオロギー下に詩をなすは、

直観粗雑の理論に屈したるなり。

と賢治は言う。また或る手紙の中で「……私の自費で出した『春と修羅』も、亦それからあと只今まで書き付けてあるものも、これらはみんな到底詩ではありません。……ほんの粗硬な心象のスケッチでしかありません。……」云々といっている。これら二つの言わば明暗の意見は一見矛盾しているように思われるが、決してそうではなく胸と背中、表と裏のようなもので両方とも賢治にとっては真実であった。「決死のわざなり」という決意と本当に他に類例のない詩作品をもちながら同時に「到底詩ではありません」という謙譲さのなかに賢治はその死まで自分を置いていた。

「春と修羅」のタイトルで通したすべての詩集の詩も「心象のスケッチ」であるというが、授業で取り上げた「作品第一〇〇四番」もその一つである。

この作品を教材にした理由は、①五年生にも理解し得る ②農業指導者として北国で命を燃やした賢治の一面を知らせたい ③本題に代わる題付けにより主題に迫らせる学び方を知らせる ④六年生の賢治の物語「やまなし」を学習するつなぎとする

る ⑤難解な詩を、解き明かしながら読み深めるおもしろさを味わわせる といった点にあった。

(2) 学習内容の概要

① 本時の学習目標

待望の春の到来を細やかな心で受けとめる北国の農民の姿を読み取り、「作品第一〇〇四番」に代わる題名を付け、その考えの根拠を説明することができる。

② 展開

(7) 事前に視写した詩を二回読んだ後、本時学習のめあてをつかむ。

(イ) 意味の分からない語句について質問した後、自分の思いや考えを行間等に書きこむ。

○どの言葉からどんなイメージが浮かぶか。

○どの言葉からどんなことが分かるか。

○全体からどんな思いや考えを持ったか。

○分かりにくいことは何かなど。

(ウ) 調べたことをもとにして、作品に描かれた情景や「わたくし」の思いについて話し合う。

○「あかるくにぎやかな雪降り」とは、雪降りの表現に合っているか。

○「巨きな重いあしおと」とは、何を意味しているか。

○なぜ、「ひるすぎてから」なのか。

○「あなた」とはだれのことか。また、「われわれ」とはだれか。

(エ) 本題に代わる題名を付け、その考えの根拠も書いて発表し合う。

○自分が付けた題名で、自分なりの味わいが表れるように朗読する。

### ③ 指導のねらい

「なんのことやらよく分からない」と首をかしげながらも、教材を提示した途端、教室は湧き立った。難解であるが、子供はくいつき始めた。不可解な部分は多いが、初発の感想でも題名のこと六人から挙がった。

「詩の意味が分からなかったし、何が言いたいのかも分からない。題がこんな番号じゃなしに、他の題を書いていてくれたら、ちょっと分かるかもしれない。」(多田幸雄)に代表される。賢治の作品には、題名に作品番号が付いているものが多いが、中には作品番号のみの詩もある。そこで、本題に代わる題名を付ける学習をすることにより、一つの語句を読み深め、主題をとらえさせようとした。

### ④ 児童の反応

雪国では数か月にわたり、どんよりくもった空から雪がしんと舞い降りてくることは、四年生の社会科「雪の多い地方のくらし」で学習して知っている。

季節は冬。しかし、冬の初めか、真冬か、冬の終わりをめぐり、反応が割れた。冬の初め、真冬と考えた半数の子供は、「今日も」でなくて「今日は」になっていること、「ひるすぎてから」足音が行きすぎたことにはまだ気付か

ず、「梢の雪が地面の雪に落ちるの」は、降りしきる雪の重みだけで落ちると考えた。

そこで、「今日はあかるくにぎやかな雪降り」でいつもと違っていることと、「ひるすぎてから」足音がし始めたことを引き出し、やつと雪解けごろの冬の終わりだと気付かせることができた。

「巨きな重いあしおと」は、梢の雪の落ちる音とすぐとらえられたが、なぜ行きすぎるのか、そして「あなた」はだれかという新たな疑問が子供たちから起こった。

一つ一つの言葉を手がかりに作品の世界に思いをめぐらし、真剣に答えを考えたが、ここでも意見は分かれた。

①人間(だれか知っている人) ②恋人 ③死んだ人

④雪 ⑤季節(冬) ⑥季節(春)

根拠を挙げて話し合ううちに、①昼すぎてから、巨きな重い足音が幾度ともなく行き過ぎたこと ②それは気温が上がって、解けた雪のかたまりが落ちる音であること ③「そのたびごとに」わたくしに一年ぶりのあなたがたが来てきたことに自分で気付いたことがイメージ化され、吉岡佳永の「やっぱり春がたずねてきたのではないですか」が確かめられ、一気に「そうだ。」と納得していった。

しかし、「それならば、われわれとはだれか」という問題が残った。しかも、「あしおと」が「足音」という漢字表記になっている。(宮沢賢治の他の作品、「岩手軽便鉄道の一月」という詩でも「つるし」と「吊し」の例もあるが、何ら

かの意味を持つのだろうか。」

「雪国で春の足音を待ちわびる人は？」という発問で、われわれの足音とは、農家の人たちが春になって田畑を歩く音だとする考えを引き出したが、賢治は童話作家と思ひこんでいた子供たちには、「わたくし」という話者（語り手）を設定して農民の姿（雪の落ちる音から春の到来を敏感に感じ取った）を表した賢治の思いを読み取るには時間がかかった。

そして、そのすぐあとで横山卓弘から質問が出た。「雪が落ちるのは上から下へなのに、あしおとが行きすぎましたというのは横に進む感じがするのはどうしてか。」と言う川竹一は、「それは雪の音だが、それは春がそこまで来て雪が解け、ドサツ…ドサツ…と落ちる音だ。だから、その音は春の気配が行きすぎることだ。」と答えたが、この作品の世界に迫ることができたような気がする。

時間を超過して付けた題の主なものとは次の通りである。

・春の足音 ・雪どけ ・春の返事 ・春のおとずれ  
・早春 ・春の音 ・やつと ・春まであと少し ・雪国  
・あなたのおとずれ ・春 ・長い冬 ・冬から春へ  
・喜びの春

# ⑤ 学習作文から

この詩の学習前、この「作品第一〇〇番」を読んだのだけど、この題からはさっぱり分からず、「どうしてこんな

におもしろい題が付いたのだろう。」と不思議に思いました。それに、内ようもいったい何について語っているのか、何を表そうとしているのか、不思議でした。

でも、学習後、私のこの詩に対する気持ちは大きくゆれ動き、農家の人々の春を待つ強い気持ち、どんなに春を待ち続けたかというあつい気持ちがよく分かりました。そして、今、雪はとけようとしているのです。そのため私はこの詩を「雪どけ」と名付けました。

これから雪はどんどんとけてくることでしょう。その雪どけを北国の農家の人達はどんな気持ちで見守るか、私は、今そんなことを考えています。

（滝下智佳）

詩の感じがしないので、とても読みにくかった。歴史的仮名づかいを使っているので、現代のふんいきに合わない。今日の雪降りのことを宮沢賢治はあかるくにぎやかといっているけれど、ぼくが見たときは、空がはい色になっているので、雪がふっている間は暗い感じがした。つもったら白銀の世界になるので明るい、賢治が見たのは、春に近い空だったのだろう。

むかしの北国の農家は、今とちがって生活が苦しかったので、あんまり楽しい詩の感じではない。わたくしは家の中にいて音を聞いただけで、春が来たと分かったのがすごい。ぼくは、わたくしが待っていた「春の足音」にした。（瀧雅行）

## 五、授業の実際B

雪

三好達治

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。  
次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

(「測量船」より)

この二行詩に関する実践報告や研究は多く出されており、学者によっても多様な解釈がなされている。

①まず目に見えてくるものは ②太郎、次郎とは何を表すか  
③太郎と次郎はどんな関係か ④屋根はいくつ見えるか ⑤眠らせるのはだれか ⑥どんな雪か ⑦語り手の目の位置は  
どの論点を中心にイメージ化し、経験を思い起こし、新しい心像をつくるべく三時間の討論が続いた。理屈っぽくなりかけた頃、「雪」から見えてくるものを文で表そうという課題で、鑑賞文を書かせた。

「グー、グー」太郎がねている。いばったように。母親は、太郎がとでもえらい人になることをねがっている。

「スー、スー」次郎がねている。母親にあまえたそうに。母親は、次郎が幸せになることをねがっている。  
感じてきた、太郎と次郎の母親のあたたかさと、天からふる雪のやさしさを。

(加藤淳一)

外では雪がしんとふっている。家では太郎がぐつぐつりと深い眠りに入っている。べつの家では次郎が、これまでとぐつぐつりと深い眠りに入っている。べつの家では三郎が、四郎が、五郎が、六郎がぐつぐつりとねている。どの家でもお母さんが子守歌を歌ってあげていた。屋根には雪がふりつもっている。まだまだ雪はやみそうもない。雪あかりであかるい。子供がねているそばで、お母さんが編み物をしている家もある。

外はとでも静かだ。物音といえば、雪が、しと、しとと小さな小さな音で落ちていく音だけだ。

明日になれば、雪合戦でにぎわうだろう。こんな静かな夜は、もう二度とない。

(多田幸雄)

## 六、おわりに

難解で、発達段階上、指導をためらってきた作品に児童は予想以上の興味を示した。今後の教材開発の一つの指針となった気がする。

私自身、想像の世界に浸り、新しい心像をつくり出していく授業の質が高められるよう、教材研究を進め、授業力を身につけたい。